



寄り道

本屋

ある日、古びた本屋で古びた本を見つけた。
興味なんて無かったのに、なぜか本に呼ばれている様な気がした。
気が付くと、その本を買っていた。中を開いてみる事もせず。
大して高くなかったが、題名すら読めなかった。
中身も見ずに本を買ったのは初めてのことだ。
興味がなかった癖に、速く本を開いて見たいと思った。
本を読める適当な場所を探しながら帰路に着いたが、何時の間にか自分の部屋の前に着いていた。

部屋に入り、靴を丁寧に脱ぎ、パイプイスの横に置かれた其れ、上着をハンガーにかけ、自分の落ち着く為のパイプイスに腰を掛けた。

冷蔵庫に丁度良い飲み物が入っていたことを思い出し、冷蔵庫に向かう為に立ち上がった。

少し立ちくらみが襲う。

冷蔵庫の中には殆ど物が入っていなかったが、目当ての飲み物ばかりが目についた。

それを手に取り、パイプイスに戻った。

パイプイスに帰る途中にプレタブに指を掛けた。

「プシュ」

という音が無音の部屋に響いた。

古びた本はパイプイスの横にまだ置かれていた。

パイプイスの横に手を伸ばして、本を手に取った。

飲み物を喉に少しだけ含ませた。

本を開いた。

無音の部屋。

パイプイスに座る私。

飲み欠けの飲み物。

古びた本は何も書いていなかった。

白紙、白紙、白紙、何処まで開いて「白紙」

目を疑った。

目を擦った。

やっぱり「白紙」。

白紙な本。

少し悔しくなった、飲み欠けの飲み物を飲みきった。

自分の知的好奇心を静める為に、外に出ることを決めた。

ハンガーにかけた上着を着、靴を履き、帰ってきた時と違うのは、私を裏切った本を持っていないだけ。

そう本は私になにも与えはしなかったのだ。

夢

夕方過ぎに、悪い煙草に火を着けた。

イヤホンからは異国の固く歪んだ高揚のための音の流れ。

それによって少しだけ休憩、ベンチに座り込んだ。

少しの寒さに気が着き、地下鉄に向かって歩き始める。

それこそフラフラと歩きながら。

足元が覚束無いだけがいつもと違い、いつもと同じ道を歩いていた。

いつもと同じなんて事は無く些細な事は目まぐるしい速さで変わっているのだが、そこに目が追いついてこないのだ。

先の煙草効果か？私の注意力が無いことなのか、それすら些細な事に感じていた。

地下鉄はいつもと同じようにホームに滑り込み、私は石柱に寄掛かっていた重い体を持ち上げ、電車に乗り込んだ。

扉側にやはり寄掛かり、真っ暗な無機質な背景が右手に進んで行き、つまらない風景を細目で見ている。特に何を感じるわけも無く、特に何か思うわけも無く。

今日まで降りて観たかった駅に着いた。

降りる客がいたらしく、私は重い体をその駅のホームに引きずった。降りる人を見送り、私は今まで乗っていた電車が私を乗せずにドアが閉まっていく様子が目に入った。焦るわけも無く、困るわけも無く、私はその電車が走り去っていく様を見送り、その駅から外に出てみようと思った。

それは、「降りて観たかった」からか、「悪い煙草」のせいか、多分だが、両方が良くも悪くも作用したのだと思いながら、階段を上り、外に出た。

そこには初めての町の風景が広がっていた。

人が流れ、無機質な箱が流れ、雲が流れ、季節が流れる。

変わらない世界が。

駅から出て誰に言われるわけでもなく、そこに淡い期待があったわけでもなく、ただ雲の流れとは違う西に歩き始めた。

始めて見るビル、始めて見る公園、始めて見る道路、何年か前に見たことあるお店・・・

来た事がある？

何年か前によく前を見ると、見慣れた町が広がっていた。

一時期、頼まれもしないのに、ただ只、自分の我儘でこの町に通っていた。

その時、小さなプレイヤーから流れる音の流れが耳を満たしていた曲はその時、耳を満たしていた曲。

何を思ったか。

「待ち人來ない待ち合わせ」と誰かが私に言った。

獣道 1

今日は暖かくって言うよりも暑い...散歩に出たら「死ぬ」そんな言葉すらあてはまりそう。

汗だくになって帰り、今日は引き籠る予定。

人生の脇道に逸れっ放しの私、、、意外と普通の道路を歩く。あまり脇道に入る事無く。だからこそ脇道は素敵におもえてしまう。普段とは違う景色が見ることができるのだから。そう偶の脇道にそれて歩いてみる。

今日、見つけたのは脇道と言うより獣道。

草が生い茂り、私を魅了した。

その道の入り口だと思われるところに、小学生らしい子供が立っていて。私と目が合うとその子供は目に見えない力で私の腕を引っ張った。私の足は歩いてきた道からその獣道に向いていた。

私は草を手で掃いながら、跳ぶように駈けるその子どもの後について行った。そこには草が生い茂るものの漫画に出てくるような空き地が広がっていた。そこには子供が何人か居たがそれぞれ遊んでいた。空き地を所狭しとかける少年・草を摘んで何かを作る少年・地面に絵を書いて遊ぶ少年・無駄に飛び跳ねている少年。何人かの少年がそこで遊んでいたのだ。

私はこの子どもたちの秘密基地か何かだと思いつつながら彼らの様子を眺めていたのだが、奇妙な事の気が付いた。彼らは何人もそこに居るのに誰ひとりとして誰かと遊んでいないのだ。そう彼らはひたすら独り遊びをしているのだ。

私は私をここに連れてきてくれた、少年にこの疑問をぶつけてみた。

「なんで皆、友達と遊ばないで独りで遊んでいるの？」

彼は不思議そうな顔をしてものの答えてくれた。

「皆？友達？ここには僕とお兄さんしか居ないよ。」

そう言うと彼はまた独り遊びを始めたのだった。

彼には他の子が見えていないのか？と思うものの違う子供のすぐ近くを通り過ぎたりするのに気が付かないものか？

よくみると皆、そっくりな顔をしていた。

なるほど彼らは兄弟のようだ。しかしさっきの言葉も納得できる。

「僕とお兄さんしか居ない。」他の子供は私の腕を引いて来た子供の兄である会話に私は入って居なかったのだ。

少し納得できた。

私は黙って彼らの様子を見ていた。

獣道 2

そこに、私の腕を引いて来た少年が私の前に立って不思議そうに私を眺めていたので、私はまた彼に聞いた。

「兄弟で遊ばないの？仲が悪いの？」

少年は悪戯に笑って答えた。

「可笑しなお兄さん。兄弟なんてここには居ないよ。まだ気が付かないんだね。」

私はよく解らなかった。この子は何を言っているのか？

少し混乱して周りを見た、子供たちが私を見て笑っている。

皆、とても悪戯に。

私は少し混乱しながら、子供たちをよく見てみた。

私はこの少年達を見たことがあった。リアルな世界ではなく、写真の中で。そう彼らは私自身の子供の頃の姿だった。

狐に抓まれた気分になり。顔を歪ませた。

その顔を見て少年の1人が私にこうやってきた。

「やっと気が付いたんだね。」

ニコニコと暖かく笑いながらそこに居た少年の頃の私は徐々に消えていき。

フと私は我に帰った。

私はもと歩いていた道に居た。そこに少年だった私の影は無く、いつもの道に足を直している私。

小学生だったり幼い頃の私だったら何も考えずにその獣道に入って行っただろうと思う。そこにどんな冒険が有るかもしれないと淡い期待を描きながら。

微熱

其れは至って簡単な事だった。

始まれば終わる迄の間が必ずあって私の言葉は宙で纏まる事無く、浮遊して衝突しては砕け巧く交し勝手に縦横無尽に漂うのだから。

其処には良くも悪くも成功と失敗がある。成功すれば完成、失敗すれば無となる。

蓄積された物は良い物も悪い物も其処かに溜まって行く。其れからが時に枷になり、其れが時に翼となる。だから何かをためる事が重要なのだ。例えそれらが巧く働かなくとも、どんなに苦しくとも悲しくとも其れを飲み込んでいかなければ行かない。

風を纏い、弱まった夏の熱気を掴み、私は此処が何処かなど考えずに歩かなければいけない。そもそも帰り道なのか目的地を目指しているのか、私には解らなくなっていた。

「風は如何にして吹くのか？」そんな下らない質疑応答が繰り返される。

問題は「如何にして吹くのか？」ではなく「何故、吹くのか？」なのだろうと質問のベクトルは私の思考の中で変化する。

町並みは緩やかに変わり、人の足音も減ってゆく。日はゆっくりと傾き始め、私の影を広く高く黒さ深め伸ばした。下らない思考は私の思考回路をまだ嘯みついているようで私はオレンジと黒と灰色のコントラストに目を奪われながらもまだ風について考えていた。

頭の中に其れを置いて置く事でいつか風がそっと議題を教えてくれるように思えた。其れが如何に幻想の戯言だと解っていても、その思考から抜け出す事は出来ない。

否、出来ないのではなく、したくないというのが、正直な答えなのだろう。

日は一足また一足と黒と灰色に向かって歩いて行く。

私は不解な解気を引き連れて行き先の無い帰り道に歩を進めた。

旧友

良い事は思い出。

悪い事は記憶。

誰かの言葉。

やらなければいけない事が多々有り、その中から適当に幾つか抜粋して、少しだけやってみる。

幾つかの音楽が頭を駆け巡り、少しだけ上機嫌。

それまでは。

君の顔が突然、浮かぶ。

その彼だか彼女だかと一緒に居た時の事が自動で駆け巡る。

それまで居た音楽たちは影を潜め。

君が今、何をされていて、何処に居るのか私は知らない。

と言うよりも、今日の今まで君の事を考えることなんて無かった。

君は今、私の事を覚えているかすら、私は解らない。

そう、今日の今まで私は君のことをちっとも考えたりしなかったのだから。

何で君の顔が突然、脳裏に浮かび、駆け巡ったのか？

やっぱり、私は解らない。

やらなきゃいけない物がなかなか進まなくなったよ。

今、思うと君はとても純粋でいつも笑顔。

今、思うと君は今の私なんかより大切と言う言葉の意味を知っていたのかも知れない。

君から貰った物、ずっと大切にしていた気がする。

ゴメンナサイ。今は何処に行ってしまったのか解らない。

馬鹿な私をお許してください。

君が今日、私に何か大切な事を教えてくれた気がする。

君は今、私に逢っても君付けで呼んでくれるだろうか？

私は今、君に逢ったら、あだ名で呼べるだろうか？

何でか解らない。

君を思い出した。

何でか解らない。

涙が出そうになった。

今も笑って、今も幸せに暮らしていること祈ります。

私は元気だから。

外用の鍍金をはがれる前に止めて置きます。

少しそれた其処に

少しそれた其処に。

其れは在った。

高くの伸びきれず頭を垂れ。

高い部分は沢山の緑。

それこそ頭が垂れても納得できる程に手を広げ、多方向に手を伸ばした。沢山の日の光を浴びる為。

低い部分は茶色い日陰。

日が当たらないためか、伸ばしたであろう手は皸くちやになり変色していた。今にもまるで何も無かったかのように。

何よりも誰よりも高く伸びようとしていた「それ」。

頭が垂れなければきっと私の胸の高さまであつただろう。

否、きっと私なんかよりはるか大きく。

誰よりも高く伸びている為に「それ」の周りには誰も居らず、そっと静かに日の光を伸ばした手に集めている。

けれど、

どんなに立派に成ろうとも、

「それ」の周りには何も無く、誰も居ず、

静かに無機質が1つだけがそっと置いてある。

少しそれたそこだから、

どんなに立派に成っても、誰にも気が付かれずに。

少しそれたそこだから、

私は少し見ることが出来た。

少しそれたそこだから、

「それ」は今でも生きている。

少しそれた、、、？

本当に、それているのは誰？

追春

怒りすら感じる夏が過ぎるだろう。

ベンチに腰掛けた男の右手には煙草、左手には本。すぐ側に珈琲。
幾分か風を感じ、シャツが体に纏わり付く湿気を感じた。

風が吹けば一枚また一枚と枯葉。

別れの夏が遭っただろう。
出会いの夏が逢っただろう。
哀しき夏が遭っただろう。
喜びを感じる夏が逢っただろう。

去り行く夏に終止符が無いように、秋の始まりは雲のよう。

秋風と夏風の交じり合う一瞬に、
終わりを告げる言葉と始まりを告げる言葉。

風が吹き枯葉が舞う香りに奪われ。
その男、読物に耽る。

出会いの夏が終わるのは哀しきかな。
別れの夏が終わるのは哀しきかな。

黄昏は小雨の粒で終止符を打ち、
その男、本を閉じベンチから立ち上がれば、
まだ終わらぬと蟬時雨。

二人のサンタクロース

「やあ久しぶり。」
彼の声が聞こえる。
「やあ久しぶり。」
必死になり答える。

「サンタクロースの謎は解けたかい？」

私は、纏まらない答えを彼に告げた。
「色彩のみの答えなら。」

「へえどんな色彩だい。」
身構えながら答える。
「セピアとモノクロだよ。」
正解では無く間違いでもない。

彼も怪訝な顔をする。

暖かいセピアと、
冷たいモノクロ。

知ってた。
彼も私も。

サンタクロースの謎はいったい？

私も彼も本当は知らずに。
少しの解決。

今、最も必要なのは、「其れ」だった。

君の幼さと、
君の大人を、
ゆっくりと消化しよう。

モノクロとセピアが混じり合うまで。

Brake time

昼ということも有ったがやはり年始の風が冷たく吹いていた。私は休み時間との事なので少しその冷たい風で更に自分自身を錆びさせようと冷たく吹き荒れる風を見つめビルの外に出た。やはり其処には年始の冷ややかな風が吹き荒れていた。

少しだけ出たところに公園には程遠い広場がそのビルの喫煙所になっていて、私はそこで少しだけ煙草を吸うために、立ち止まった。

煙草に火を着けるか、着けないかの瞬間、雑踏やら人込みの話し声を駆け縫い、美しくも哀愁に溢れた音色が聞こえた。

目をやる先には小汚い男がハーモニカを愉しそうに吹いていた。

男が自分の作り出した音楽で踊っているのか、作られた音楽に踊らされているのか私には解らなかった。

ただそこには美しさにも似た何かがあった。

私は辺りを見渡したが、その男の演奏を聴いている人間は居なかったが、聞こえてる人間はその場の大部分を締めていたと思われた。しかし、その男の演奏を聴き入っていた人間が一人だけ居た。

その男は不貞腐れたように煙草を飲んでいて。

私は音楽を奏でている男と不貞腐れている男を注意しながら煙草を嗜んでいた。

しかし、そこにある「音楽」は直ぐに私の注意を惹きつけ、私は「不貞腐れた男」を忘れさせようとした。私はゆっくりと煙草の煙を吸い込み、そこにある「音楽」に耳を傾けた。

そんな至福のひと時は「音楽」が止んだときに終わり迎えたが、また直ぐに男はハーモニカを吹き始めると、そこに至福が現れた。

私はその音色を聞いていると錆付いた心やら体が温かな何かに包まれていくようなそんな気がした時、フツと「不貞腐れた男」が気になり、その男の方を見た。「不貞腐れた男」はその場を離れ、どこかに行ってしまったらしい。私は「不貞腐れた男」の事などどうでも良いと考えまたハーモニカの音を聴く為「演奏する男」の方を見た。

その演奏に次第に心を奪われ始めた。心が少し軽くなった気がした。

「演奏する男」に何かお礼をしたいと思ったが、演奏し続ける彼にどんな礼が有るのか解らなかった。

私があれこれ模索していると、何時の間にか「不貞腐れた男」が「演奏する男」に近づいて行くのが目に入った。

「不貞腐れた男」は「演奏する男」の側に缶ジュースを置き、「演奏する男」と目を合わせると、指で胸の辺りを「トントン」と叩き、何も言わずにビルの中に入って行った。

私は、

「演奏する男」がどう思ったか、

「不貞腐れた男」がどう思ったのか、

未だ解らぬままだ。

不慮

身体が悲鳴をあげた。

無理をしてきたわけでは無かったが、いつか抱えた爆発物が爆発しそうになっていた。

夜は浅く眠るには早すぎた、結局、悲鳴をあげた身体を引きずりながら布団に潜り込む形になっていた。

夜の静音がやたらと耳を刺激する。眠りは近くに有ると思うも意識の糸はまだ切れる事無く、直ぐ其処に有った。

不安定を落ち着ける為に煙草に火を付けた。

チリチリとなり、深呼吸にも近い呼吸をすると、爆発物の悪意有る息苦しさがより現実的になる。

鼻は詰まり、咳による攪乱。

意識を持ちながら気を失う様にゆっくりと目を閉じた。

咳の歪みで胸や背を痛めないよう、手で胸を確り抑えつけ。

何れだけ眠ったのか、眠りを妨げる喧騒は神の使いからだった。左隣には4～5歳位の男の子が熊の縫いぐるみを抱きながら口をモゴモゴし眠っていた。

起こさない様に電話の電源を切り、ゆっくりとまた目を閉じた。先の息苦しさは少しだけ落ち着いたらしい。

静かな雨の零れる音で目を覚ました。

今日は土曜日だった。

珈琲の香りを抱き締め煙草に火を付け、今日の寒さを楽しむとしよう。

人事

昨日だって今日だって思うところは一緒。

朝起きれば、いつものようなトラブルは無いものの、トラブルって奴の顔が見え隠れ。いつも通りに珈琲を入れ、それを啜りながら煙草に火を着け、その日最初の深呼吸をする。

肺にニコチンやらタールが染み込み昨日までのアルコールをゆっくりと浄化していくかにも思えた。

酷い現実を目を覆いたくなるのだが、小さく息する天使を見ると私は目を覆う事など出来やしなかった。

その暖かな手に救われ、その優しい笑顔に救われた。

救われる事しか出来ない。

酷い現実なる昨日は結局のところ問題の「も」の字も片付ける事が出来ず今日の日の光を浴びたのだから、それ以上の問題は。もしくは生きる事体「問題」の連続なのだろう。

そう、それが無ければ、息をすることすら億劫なのだから。

ゆっくりと吸収された、合法ドラッグ。

ゆっくりと目覚める、思考と身体。

無いスケジュールが有るスケジュールに変わる瞬間。

タイトルが解らない。

タイトル通りの「それ」が無い。

何時だって。

天使が言っていた。

「それ」だと。

彼等の当たり前。

酷い夢か現実はさて置き、出かける準備に取り掛かった。

すでに予定時刻を割っていたが、焦ることのできない自分に腹を立てた。

厩舎に行くと、今日一日の足となってくれるはずの彼女はまだ夢の中。毛並みを整えているう暇など無いと解っていても、彼女の美しさが私を突き動かし、ブラシで毛並みを簡単になってしまったが、その行為が幸か不幸か彼女を起こすことになった。

目覚めの悪い事はいつもの事。偶に「彼女」だと思っから仕方の無い事。偶に逢い「彼女」と言っても彼女は私をだらしの無い男としてしか見てくれない。機嫌が悪いのはその性。

只、歩を進め無い人間は動く事が出来ない。

今日、仲間逢う事すら許されなくなってしまう。

機嫌の悪い鋼鉄の彼女を宥め、謝り、やっとの思いで跨る。

久しぶりの風。悪い気はしない。昨日の悪夢だってあやふやな幻想に変えてくれるような気がした。現実なのは変わらないのだが。仕方が無い。耳に簡単にして単純な但し今の私を作った音の羅列が流れる。一層の爽快感で手綱を持つ手は一層強くなる。風は一層強く私を叩く。それだって現実。

まだ誰も来ない待ち合わせ場所に一人着き。彼女を適当に停める。

人言

直ぐに掌大の電腦が唸る。着いたとの知らせ。

今日が始まった。

昨日が始まった。

一昨日が始まった。

去年が始まった。

何が何時始まったのか？

解るわけも無い。

私が始まった。

否、今じゃない。

それは、今じゃない。

昨日でもない。

何時？

「それ」が無い。

「それ」はどこにあるのだ？

知っているのだろう。

誰かが私に囁く。

誰かは私。

私が私に囁く。

何時。

何時から。

今居るところは一体。

家を出て厩舎に足を運び、「彼女」を起こしたのは。

何時？

今日で正解・不正解？

正解も不正解も世の中に存在する事無く。

何者。

私。

否、

お前が・・・

不安定なこいつを飼いならず。

高く丸い寺。

いつかよく来ていた。此処。

古着、喫茶、小物、何だってあるとその町は私に話しかけてきた。気の合う仲間の到着で私は彼と珈琲を飲む事になり、坂の中腹にある現在と過去が混在しているような店に入りアイス珈琲をオーダーした。

人言

マスターは大事な宝物をゆっくり優しくあやす様に氷の入ったグラスに入れたての珈琲を落とした。

何とも洒落たマスターに見とれていると、いつも以上の珈琲を口にすることが出来た。

彼も旨そうに珈琲を飲み、私も至福を口にゆっくり少しまた少しと消費した。まるで宝物が無くならないように。

そんな昼過ぎ。子供達は御菓子を楽しむ時間。

大人にも子供にも成れない私は珈琲を楽しむ。

そんな一日。

それで良い。

本当にそれで良いのか？

否、皆無な懷疑。

解らず進む時間軸。

平等に進む筈の時間軸。

忘れたときに思い出す。

時の流れの矛盾。

平等だと思わせた。

そこに過去は無く。

そこに未来も無く。

現実だけがそこに有る。

それは頑張る事でないと誰に教わった。

それを手に入れたいのか入れたくないのか。

自分自身と無我を無理矢理、合わせる。

手に入らないもの。

見てみぬ振りには誰に教わった。

「それ」を持って居る様に見せるのは、誰に教わった。

解らぬまま。

答えぬまま。

ただただ時間は流れていく。

完